

## 国立アイヌ民族博物館 研究学芸部 資料情報室

### アイヌ民族資料の恒久的な保存のために

#### 1. 国立アイヌ民族博物館 資料情報室

2020年に北海道白老郡白老町に開館した国立アイヌ民族博物館は、民族共生象徴空間（ウポポイ）の中核施設の一つとして「先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、アイヌの歴史・文化に関する正しい認識と理解の促進、そして新たなアイヌ文化の創造と発展に寄与する」という理念のもと、アイヌ文化の展示、調査研究、教育普及、人材育成、資料整備等に取り組んでいます。

国立アイヌ民族博物館の学芸業務を執り行う研究学芸部では、4つの室に分かれて業務を行っています。その一つである資料情報室は、博物館資料にまつわる、資料の収集、整備、管理を主とした業務としています。収蔵資料の恒久的な保存を目的とした収蔵庫などの保存環境の制御、それらに付随した資料の科学分析なども資料情報室の業務の一つです。資料の中には劣化が進み、脆弱な状態のものもあるため、保存する環境にも配慮が必要となります。

#### 2. 保存環境の制御と資料分析

保存環境制御の日常的な業務の一つとして温湿度、空気質、虫害のモニタリングを行っています。また、資料に応じて適切な処置を施すことで、資料の状態を保つと共に、展示・収蔵環境の維持につながっています。具体的な例として、温湿度では、展示室、展示ケース、そして収蔵庫の温湿度をデータロガーによりモニタリングしています。展示室や展示ケースの温湿度は毎日確認し、異常があれば、すぐに対応できる態勢を取っています。また、湿度変化による変質などの危険性がある資料を展示するケースには、調湿剤を設置するなど個別の対応を取っています。空気質は、展示室や展示ケース内部の有機酸やアンモニア濃度を定期的に測定し、資料に影響を及ぼさ

ない濃度となるよう管理しています。虫害は、展示室や収蔵庫などの要所に虫トラップを設置し、侵入してくる場所、虫の種類や数をモニタリングしています。当館の周囲は自然が広がり、多種の虫類が生息していますので、資料に影響を及ぼす代表的な虫類の他にも、日常的に外部から侵入する虫類にも注意しています。また、虫類やカビの被害が及んでいる可能性がある資料は、状況に応じて殺虫処理などを施し、被害の拡大を未然に防ぐよう努めています。

資料の保存を考える上で、資料の材質や構造、また状態を知ることが求められます。博物館資料は、非破壊の取り扱いとなるため、前述の情報を得る手段として科学分析が用いられています。X線CT装置は（図1）、資料を破壊することなく内部構造などを把握できるため、当館の資料調査には欠かせない分析装置となっています。他にも複数の分析装置を用いて、資料調査を行っています。科学分析によって得られる情報は、資料の製作技法、製作された時期や地域などの推定に有用な情報となります。アイヌ民族資料には製作技法などの詳細が残っていないものも多いため、資料研究に役立つ情報としても提供したいと考えます。

#### 3. 保存環境に関する研究

保存環境に関する研究では、現在、CFD解析を用いた収蔵庫内の空気の流れに関する研究を行っています。当館の収蔵庫はソックダクト空調を採用しており（図2）、解析結果より均一な温湿度環境を保っていることが確認できました。今後は、収蔵庫における資料の配架計画や、増改築を視野に入れた環境解析などをCFD解析を用いて行いたいと考えています。

（国立アイヌ民族博物館、研究主査、  
古田嶋智子）



図1 X線CT装置



図2 収蔵庫ソックダクト空調